

とりのゆめ

みやはらたかお



aw



Published by 1938 books © 2023 Takao Miyahara

Mail: miya@1938.jp URL: <http://www.1938.jp>

2-9-27#3B, Minami-Aoyama, Minato-ku, Tokyo, 107-0062, Japan

No part of this publication may be reproduced without the written permission of the Publisher.

2022年の師走、夜明け前に目がさめた。夜中に起きた時は直前にみた夢をおぼえていることが多い。この日の記憶はいつもと違っていて、夢の情報の大きさや圧倒されていた。分かってもらえるか自信がないけれど、忘れてしまわないうちに書き残してみることにした。

信じがたいかもしれないが、毎晩みる夢には現実の十倍以上の世界が広がっている。これまでに経験してきた記憶をもとにした世界だけでなく、行ったことのない場所、会ったことのない人々と毎日のように、何かしらの活動をしているようだ。この日の最後の夢は小泉さんの会社で夢の葉っぱを集める仕事だった。小泉さんのところにもずっと通って働いていたらしい。そこで出会った人たちも何十人もいて、すっかり顔馴染みで、中には親友と呼べる人もいる。古い付き合いの人が亡くなって、お葬式にも行ったこともある。

その前に見た夢はいつもの場所だった。イタリアのトスカーナ地方あたり、古



い石造の建物の二階に事務所を借りて、カリグラファーか、もしくは看板屋さんを営んでいる夢。事務所の壁にいろんな道具が吊ってあって、雑然とした霧囲気は、置いてある物が違うだけで、今の青山の事務所と近い感じがする。この日の夢は犯人探し。壁にかけてあった道具がなくなってしまっって、あのお客さんが持つていったんじゃないかと、助手と話をする夢だった。この場所の夢は何度もみた。若いころには三夜連続の大河ドラマみたいな夢をみたことがあって、それが僕の前世だと言われたこともある。

この日は二つの夢より前にみた夢も覚えていた。それが少なくとも十箇所あった。それぞれに現実の世界と同じくらいの過去があるから、現実世界の十倍以上の記憶が自分の頭にあると知って、脳圧が上がったような気がした。

というわけで、今回はこれまでに見た夢の中からお気に入り、A I (Stable

Diffusion 2.1 Demo) による画像生成、十八世紀のスペイン絵画風挿絵にて。



一つ年下の松尾の家に遊びに行こうと、井戸水で冷やしたスイカをネットに入れて、家の外に出た。空には雲ひとつなくて真昼だったから、とにかく暑い。自分の影が真下に見えて、白飛びした景色をしばらく歩く。いつもは三分で着くはずの松尾の家がなかなか見えてこない。黒いアスファルトの道が溶け出して足にくっついてくる。汗が吹き出して首がかゆくなってきたので、行くのをやめようかと思っていたら、突然頭の上から、メジロの鳴き声が聞こえた。松尾の家の前だった。竹のメジロカゴを持った松尾がドアを開けながら「きょうはあつかねー」と言った。右手に持っていたスイカを渡そうとしたら、暑さのせいとか、スイカは水を入れた風船みたいに柔らかくなって、ネットの隙間からはみ出ていた。上下にゆらすとビヨビヨンと揺れた。二人で大笑いした。



十代の終わり、定期的に同窓会の夢をみるようになった。小学校の体育館に、それまでに知り合った人々が全員集合している。同級生や学校の関係者、近所のおじいさん、おばあさん。床屋のおじさん。よろず屋のばあちゃん。二十代になっても、小学校の体育館に、みんなが集まっている。知り合いじゃないはずの人たちが楽しそうに語り合っている。九州の同級生と金沢の知り合い、東京の仕事関係の人が盛り上がっていて、僕は「なんで？どこで知り合ったの？」とあっちこっちに聞いてまわる。三十代になっても、当たり前のように小学校の体育館にみんなが集まっているのだが、もうこの頃には中に入れない人が校庭にたくさんいて、運動会みたいな騒ぎになっている。小学校の校長先生に、すみませんと謝りながら、なんとかみんなを体育館に押し込もうとする。



僕は卵の黄身だった。透明な白身ちゃんと楽しくお話をしていた。卵料理の話。少しずつ熱くなってきて目の前が真っ白になり何も見えなくなった。あまりに熱いので白身ちゃんに周りの状況を聞いてみたけど、わからないらしい。ようやく冷えてきて「安心していたら「きゃー」という白身ちゃんの声でした。殻をむかれて鍋に入ったらしいとの白身ちゃん情報。まわりにいる大根とシラタキが、何鍋なのかという論争をしているようだ。「ゆで卵が入っているんだから、おでんに決まっているじゃないか」と、言い負かして、いい気になっていたら、また熱くなってきた。心配症の白身ちゃんをなだめていると、突然、僕の額をかすめて箸が入ってきた。視界が丸く開けて、人間の口がもぐもぐしているのが見えた。それは自分の顔だった。



金沢市内の美大に通っていたころ、古い一軒家に住んでいた。金沢美大という学校は課題が少なく暇だったので、生物学とか民族学、人類学に心理学と、怪しい本を片っ端から読んだ。中でもチベット密教の本がおもしろくて、その中に幽体離脱するための修行みたいな記述があった。アルバイトが無くて暇な日に実践してみることにした。顎をひいて、呼吸を教え、薄目を開ける。自分が呼吸しているのか、呼吸が自分しているのか、どちらかわからなくなるくらいまで、ゆっくりゆっくり瞑想する。頭の頂点から血が一滴ずつ、空に登って行くところを延々と想像していると、ある瞬間、その一滴の血に自分が乗って、そのまま天井近くまでするりと浮き上がってしまった。見下ろすと、そこに自分が寝ている。「眉が濃い、変な顔」と思った。天井近くから部屋を見たこと



がなかったので、八畳間なのに意外に狭いと思った。上を見ると、天井の木目にそのまま入って行って、ほこりまみれの暗い屋根裏が見えたかと思うと、金沢特有の黒い瓦も通り抜けて、屋根の上、五十メートルくらいに浮いた状態になった。いつもは窓から正面に見える桜並木の坂が、ミニチュアみたいに小さく見えた。小立野ってこんなに斜めになっていたのか、坂の途中なんだから当たり前か、なんて独り言を言った。鳥にでもなったような気持ちで、手を羽根のようにバサバサしていたのだが、そんなことしなくてもいいんじゃないか、ためにやめてみるかと思った途端、ふわーっと体から力が抜けて、すーっと降りて行った。また屋根と屋根裏を通り抜けて、ベッドの上の自分にスポンと戻って我にかえった。寝てしまつて夢をみていたのか、幽体離脱から戻ったのかはわからない。あの時見えた屋根裏が本当にああなっていたのか、確認してみればよかつたと気がついたのは、東京に出てきてからだつた。



小泉さん 去年の夢

横に並んだ夢の葉っぱ。頭の上でユーカリのような丸い葉っぱが一斉にぐーんと
とのびて気持ちいい。「小泉さんの睡眠、いただきましたー」ほくがそう報告
すると、小泉さんは、にこりともせずにご答えた。

あさにおきた葉っぱ かもしれない

こすられた首ふたつ 頭のおい

ひと月前

うで ちぎられそうになると

うで 帰ってしまいそうになつて

夏の昼 鉄棒くさい手でご飯を食べてはいけません



保存さんの話

いつ書いたかわからない夢のメモより

色が自分だと感じてました。自分がよーペーしている間に受け入れられないだろうという気持ちがあつて、毎日そういう形を出したのです。ですから賭けなわけです。つくり続けることやカナリアの脚光はアピリティー重視で冒険がないと思いますね。ボブ遊び思うの、でんでんですから。そう、チラーラの女みたいな気持ちですね。ですからエモっていうのはそういう日々。そういう色を積み重ねてなんぼの世界。群の中では部分にとつて羽根もイン。忘れて欲しいと思つてたんですが、色に帰したいっていうならば、へもごホームという、その気持ちを込めて皆さんにも分かてもらいたかつたんです。十二月ですけど、そういう形でやれることはないんじゃないかと思いがちなんです。切ったり売ったりよりも、逆に新しい村意識を消したわけですよ。

